

# 子の不登校を経験した母親が相談機関につながるまでの行動と 心理的变化過程

## — 複線経路・等至性モデル (TEM) による分析 —

小嶋 秀幹\* ・ 田中 玲衣\*\*

### 要旨

子の不登校について相談機関につながるまでの母親の行動と心理的变化を複線経路・等至性モデル (TEM) を用い、質的に分析した。研究応諾が得られた4人の母親に対して各3回の聞き取り調査を実施し、その内容からTEM図を作成した。子の不登校に際して母親はまず動揺し、不登校への疑問を感じ、子への接し方に悩んでいた。子の問題行動、学校の事務的な関わり、学校への期待は、社会的方向づけとなり、母親の不安と焦りをもたらしていた。母親は学校の対応に失望し、不安と回避的な心情を経て、「何とかしないと」と、見通しをもてないまま相談機関に援助希求行動を起こしていた。相談時に母親が、安心して話せる雰囲気を感じたことが相談機関につながるために必要であった。経過中、家族や友人の情緒的支援と情報提供は社会的ガイドとなっていた。学校は、スクールカウンセラーと協働し、子が不登校になった母親の心情を初期から共感的に理解する支援が求められる。

キーワード：不登校、相談機関、複線経路等至性モデル (TEM)

### I. 問題と目的

文部科学省の調査によれば、平成30年度における小中学校の不登校児童生徒数は16万4528人と報告されており、過去最多となった。平成29年2月に教育機会均等法が成立し、フリースクールなど「学校以外の場」の重要性が認められ、以後、教育機会の多様化は広がりつつある。また、学校内へのスクールカウンセラーの配置は進み、学校外にも不登校の相談機関は多く設置されるようになった。多様な教育機会を提供する上で、個々の不登校児童生徒や保護者の境遇を理解し、適切に支援する学校外の相談機関の役割は今後ますます大きくなっている。一方で、小中学校の不登校児童生徒のうち、学校内外でも相談・指導等を受けていない者は24,239人(14.7%)あり、高校生(全日制)では2724人(17.7%)にのぼる。この結果は、学校内外の相談機関は、不登校児童生徒やその家族にとって、必ずしも安心して相談できる場になっていない可能性

を示唆する。

伊藤(2006)は、不登校の子をもつ保護者は「登校を促してほしくない」という気持ちの反面、学校からの連絡がないと「見捨てられ不安」が起こるという気持ちの揺れがあることを報告している。飯田・金沢・井上(2006)は、中学生の子をもつ保護者が相談機関にもつイメージについて調査し、「相談機関に対する不信感」(相談は問題解決につながらない、信頼できない等)、「親としての脅威」(相談すると悪く言われそうなど)、「子への影響」(相談することで、子が嫌な思いをする等)といった否定的な因子を抽出した。藤後・大橋・岩崎(2013)は、保護者を対象にスクールカウンセラー利用イメージを調査し、「調整・解決への期待」がある一方で、「利用前の不信感」、「利用後の心配」といった、スクールカウンセラー利用に消極的な因子も抽出している。

子に不登校などの問題が起こっても、自発的に支援

\*相談室委員：福岡県立大学大学院人間社会学研究科 心理臨床専攻 教授

\*\*特定医療法人富尾会 桜が丘病院 臨床心理士

を求めない保護者も存在する。張替（2008）は、支援を求めない保護者は、自発的に来談する保護者よりも、より大きな傷つきや罪悪感、葛藤を抱えているため、来談できないと述べている。熊倉（2002）は、初回相談における保護者の「来談時不安」には、子育てを非難されることへの不安、家族の秘密がばれることへの不安、家族負担を知られることへの不安があると紹介した。支援を求めることに対して葛藤が大きい保護者には、支援者からの働きかけも難しく、相談機関につながりにくい状況がある。吉村・家近（2014）は、不登校などの問題状況にいる子の保護者への半構造化面接を行い、保護者は来談時に、子が不利な状況になることへの懸念を持ち、スクールカウンセラーや相談員の値踏みをしていたと報告している。

このような先行研究から、不登校児童生徒の保護者は、相談機関に対して、否定的イメージや複雑な思いを抱えながらも、周囲からの働きかけ等によって、何らかの意識や行動の変化があり、相談に至っていることがわかる。従って、その意識の変化過程を詳細に検討することは、学校教員や学校外の相談機関に従事する援助職者にとって、保護者を支援する適切なタイミングや方法を考える上で、重要であると筆者らは考えた。子が不登校になった際に学校と関わる保護者は母親であることが多い。そこで本研究では、子の不登校について相談機関を利用した母親が、子の不登校開始から相談機関につながるまで心情と行動の変化を調査することとした。この調査を行うことで、支援を受けることに消極的な保護者に対する援助の方法を探る手がかりとなるのではないかと考えたからである。

本研究のリサーチ・クエスションは、「子の不登校を経験した母親は、相談機関につながるまでにどのような心情を経験し、行動したのか」とした。

## Ⅱ．方法

### 1．調査対象

対象者は、調査時点において、子の不登校について筆者らが運営に関係していた不登校ひきこもり支援相談機関で支援を受けていた、あるいは受けた経験を持つ母親で、研究応諾が得られた4人であった。対象者の概要を表1に示す。対象者の年代はすべて40歳代で、調査時点における相談機関の支援状況は、支援が終了した者2人、支援継続中の者2人（うち、相談機関の家族会に参加している者1人）であった。対象者における、子の不登校時期は、小学生時1人、中学生時1人、高校生時2人であった。子はすべて男子であった。いずれの子も不登校開始当初は、家族への暴力（A）、暴言（B）、対人恐怖（C）、自殺のそぶり（D）などの問題行動が顕在化していた。子の不登校開始から、対象者が相談機関へつながるまでの期間は最短がCの3ヶ月、最長がDの9ヶ月であった。

対象者には研究テーマや目的、プライバシーの保護、録音方法、分析方法、協力は任意であること、データの取り扱い、などについて説明を行い、文書で同意を得た上で、調査を実施した。本研究は福岡県立大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：H27-43）。

### 2．調査方法

調査時期は、2016年7月～12月であった。面接は、第2筆者が相談機関内の相談室で、月に1回1時間程度の半構造化面接を対象者毎に3回行った。対象者には、①不登校について相談するに至った経緯、②相談前後の他者や相談機関とのやり取り、③周囲からの働きかけの有無、④相談前後の気持ちや行動の変化をできるだけ時系列に沿って質問した。面接では、対象者が当時の思いを振り返り、自由に語れるように配慮し

表1．対象者の概要

対象者	子との続柄 年代	子の性別 不登校の時期	不登校後の経過概要
A	母親 40歳代	男子 高校2年時	昼夜逆転、父親への暴力あり。半年後、フリースクール通所を開始、翌年から転校。
B	母親 40歳代	男子 高校1年時	引きこもり、親を避け、暴言が毎日あり。翌年からフリースクールに不定期に通所。
C	母親 40歳代	男子 中学1年時	腹痛、頭痛、対人恐怖、ひきこもり。フリースクール通所を経て、半年後に転校。
D	母親 40歳代	男子 小学5年時	当初は希死念慮あり。翌年、フリースクールに通所を開始し、学校に復帰。

た。

### 3. 分析方法

#### (1) 分析方法の選択と特徴

先述したリサーチ・クエスチョンの調査に際して、最も適合する分析方法として、筆者らは、複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model; 以下、TEM と記す) による分析を選択した。TEMは、Valsiner, Jが創案し、「人間の経験を、時間的変化と社会的・文化的な文脈との関係で捉え、時間を捨象することなく、人間の思考や行動、態度、感情の時間的な変化といった、その多様な過程を提示するという理念を基盤とする質的研究の方法論的枠組み」(サトウ, 2009)である。TEMの特徴は、非可逆的な時間の流れの中で、各人の経験は多様であるが、等しくあるいは類似した等至点 (Equifinality Point ; EFP) を経験するという考え方に依拠している。研究者の視点は補集合的事象の焦点化に向きにくいいため、TEMでは等至点を焦点化することが、補集合的事象の焦点化に直結するような工夫が施されている。これが両極化した等至点 (Polarized Equifinality Point ; P-EFP) である。等至点に到達するまでの間には、各人の選択や出来事があり、分岐や選択が生じる分岐点 (Bifurcation Point ; BFP) がある。また、選択をしながら人生の歩みを進めていく際に、後押しとなる影響を社会的ガイド (Social Guidance ; SG)、阻害・抑制的に働く影響を社会的方向づけ (Social Direction ; SD) とし、それらによって多くの人が制度的・慣習的・結果的に経験するポイントを必須通過点 (Obligatory Passage Point ; OPP) と呼ぶ。これらを示すことにより、意識的であれ、無意識的であれ、「こうせざるを得ない」方向へと促されてゆくありようを描くことができることがTEMによる分析の特徴である。

#### (2) 分析手順

データ分析はTEMの分析手順 (安田・サトウ, 2012) に従い、以下の手順①～⑤により実施した。①対象者の面接内容は、ICレコーダーで録音した後、逐語化し、分析データとした。②分析データをリサーチ・クエスチョンに照らし合わせて精読し、データの内容を意味のまとまりごとに切片化し、それぞれの内容を端的に示すラベルを作成した。なお、ラベル作成に際しては、個人情報記述されるものについては匿名化し、個人情報保護に配慮した。③思考や認知、行動等の変化について時間軸に沿って、ラベルを並べ、第1回目の面接時までに個別のTEM図を作成した。④第2回目、第

3回目の面接時に個別に作成されたTEM図を各自確認してもらい、加筆・修正を行い、個別のTEM図を完成させた。⑤4人分のTEM図で使用したラベルを照らし合わせ、類似した内容のものをまとめて、4人に共通ラベルを作成した上で、4人全体のTEM図を作成した。

なお、分析においては、筆者らが随時内容 (ラベル、TEM図) の共有と検討を行い、データを忠実に反映したTEM図を作成した。

## Ⅲ. 結果

### 1. 各事例の経過

表2-1～2-6は、分析データから対象者ごとに作成したラベルと4人のラベルから作成した共通ラベルを、時系列で上から順に並べたものである。

以下、まずは、各事例について、ラベルを【 】, 社会的ガイドを (SG), 社会的方向づけは (SD) で示しながら、その経過を記述する。

#### (1) Aの経過

Aは、子 (当時、高校2年生) が急に「学校を辞める」と言い出し、学校に行かなくなった (【子が不登校になる】)。Aは、子の不登校に直面し、【将来が不安になった】。【学校に行ってほしい】と思ったが、【どうしたらよいかわからない】。誰に相談したらよいかもわからず、当時、子の不登校経験があった職場の同僚とお互いのことを相談しあった (職場の同僚に相談 (SG))。お互いのことを話すだけでスッキリし、【少しは救われた】。不登校になり、子は昼夜逆転の生活を送っていた。ある日の昼間、子が外に出て行こうとしたことを止めた父親に暴力を振った (子の暴力がある (SD))。それ以降、子が怖くなり (子が怖い)、腫れ物に触るような関わりになった。父親 (Aの夫) と二人で悩み (夫と悩む (SG))、【子の接し方がわからない】と感じた。

担任の先生からは毎日のように電話がかかり (担任から頻回に電話 (SD))、【今日学校に来ていませんよ】、「単位が足りないと留年になりますよ」と言われるようになり、電話がかかるだけでドキッと、電話に出るのが怖くなった。また、先生が家に来るのではないかとこのことを恐れた (【電話と先生が怖い】)。【毎日泣くような日々】、【不安で不安でしょうがない】、【地獄のような感じ】だった。悩めば悩むほど【不安と焦り】が出た。また、この時期に息子の不登校が周りの保護者に知られるようになったことを友人伝いで知った (不登校を周囲に知られる (SD))。「周囲の人が子

の不登校についてどこまで知っているのだろう」と考えたり、「車ですれ違うだけでも見られているのではないか」と感じたりするようになった。息子のこういう状態を【人に知られたくない】、【人に会いたくない】と思い、外に出られなくなった。仕事には行っていたが、家では何も手につかなかった(【何もしたくない】)。世間体を気にして、何が何でも【学校に行ってほしい】と思っていた。学校を「**辞める選択肢はなかった(SD)**」。そういう選択肢があっただけだと思いついていた。そして、「【子に気持ちが伝わらない】」と感じていた。この時期にAは、同様の経験をした知人や親戚に相談し、相談機関のパンフレットをもらったり、学校とはメールでやり取りをしてはどうかなどの助言をもらった(【**親戚や知人の情報提供(SG)**】)。

その後、学校側から呼ばれて面談することになった。先生は子に「君の不登校の定義は何？」等と聞いたり、通信制高校のパンフレットも用意していた。このとき、「何で先生はそんなこというの？先生方もう少し考えてほしいなあ。【切り捨てるのが早いなあ】」と思い、【先生への怒り】を感じた。しかし、この時はなんとか子を**「学校にとどませたい(SD)」**というのが頭にあり、やめるという考えはなかった。先生から「もう1回停学に入れます。学校に来る意欲を見せて」等、言われて、「何で停学しないといけないの」、「【先生は辞めさせたいのだ】」と思ったが、【先生に反論できなかった】。不安な気持ちになった。この面談は【取り調べのようだった】。面談後、「もう息子はここの学校にいられないんだなあ」と【あきらめの心境】になった。この頃、Aは**「祖父(Aの父)に相談(SG)」**した。その後、Aはスクールカウンセラーへの相談について学校へ尋ねたが、担任は、「スクールカウンセラーは予約制です」

と言うのみで、具体的な提案はなかった(【スクールカウンセラーにつないでもらえない】)。Aは「スクールカウンセラーに相談するにしても予約のために学校に行くのは無理。電話する勇気も出なかった」と話している(【相談機関に電話する勇気がない】、【子の状態を話せない】、スクールカウンセラーの予約のため【学校に行くのも無理】だった。そして【どうしてよいかかわらない】状態となり、【1週間以上悩んだ】。しかし、悩む中で、【今後どうしよう】、【誰かに助けてもらいたい】、「友達は聞いてはくれるだけ、専門の人に聞かないと」(【専門家に相談したい】)という気持ちが高まり、【何とかしなきゃ】と思うようになった。

ママ友に勧められた相談機関に電話したところ(【**ママ友の情報提供(SG)**】、【**相談機関に電話する**】)、応じた相談員(心理)は「お母さん、全部話してくれていいですよ」と言ってくれて、不思議と気持ちを素直に話せた。【責められるのではないか】と思っていたが、そういうことはなかった。【泣いて話した】。心の中に溜めていたものを出して【気持ちが楽になった】。【電話してよかった】と思った。来所を勧められたが、「(その相談機関は) どんどこころだろう。(相談員は) どんな人だろう」等と考えて躊躇した(【**来所は躊躇**】)。しかし、一方で、【アドバイスがもらえるかも】とか【**助けてもらえるかも**】という思いもあり、【**すぎる思い**】で、【**行かなければ**】と思い、相談に行った(【**相談機関に相談に行く**】)。来所しても相談員は堅苦しくなく、話しやすく、「来てよかった、何でもっと早く来なかったのだろう」と思った。相談して何回も泣いた(【**安心できる体験**】)。その後、相談機関につながり、息子も相談機関のフリースクールに通うようになった(【**相談機関につながる**】)。

表2-1. 4例のラベルと統合したラベル(子が不登校になる～子の接し方に悩む)

統合したラベル	Aのラベル	Bのラベル	Cのラベル	Dのラベル
子が不登校になる	子が不登校になる	子が不登校になる	子が不登校になる	子が不登校になる
動揺する	将来が不安になった	子がひきこもる(SD)	子は閉じこもる(SD)	子を問い詰めた
	学校に行ってほしい	不登校に驚く	子は「人が怖い」と言う(SD)	子は「死ぬ」という(SD)
	どうしたらいいかわからない	子の暴言(SD)	どうしよう	子と二人でいられない
	職場の同僚に相談(SG)	子が豹変した	祖父とは話していた(SG)	自分がどうにかなりそう
	少しは救われた	面倒なことになった		将来への不安
	子の暴力がある(SD)	誰かに助けてほしい		生きていてほしい
	子が怖い	誰も助けてくれない		楽観的に考えていた面もある
	夫と悩む(SG)	しっかりしなければ		ママ友に相談(SG)
不登校への疑問		冷静になれない		
		混乱した		
		自責		
不登校への疑問		なぜ不登校になったのか	なぜ学校に行けないの	何で学校に行かないの
子の接し方に悩む	子への接し方がわからない		接し方がわからなかった	子への接し方がわからない

子の不登校を経験した母親が相談機関につながるまでの行動と心理的变化過程

(2) Bの経過

Bの子は、高校に入学してすぐに不登校になった（【子が不登校になる】）。息子は部屋に引きこもり、親を避けていた（【子がひきこもる (SD)】）。部屋から出てこないため、話もできなかった。Bは、まず驚き（【不登校に驚く】）、【子の暴言 (SD)】に、【子が豹変した】と感じた。【面倒なことになった】、【誰かに助けてほしい】と思ったが、一方で【誰も助けてくれない】こともわかっていた。母親である私が【しっかりしなければ】と思うが、【冷静になれない】。【なぜ不登校になったのか】わからず、【混乱した】。そして、理由なく、自分のせいでも不登校になったと思ひ込み、【自責】した。

【担任から頻回に電話】がかかったが、子が学校に行けないことを言えない雰囲気のため、電話は拷問のような感じで苦しいと感じた（【電話に出るのが苦しい】）。電話が嫌になり、【電話に出られなくなった】。そのうちにBの心情を担当が察したのか、「いつもかけてきてもきついでらうから」と【電話の回数は減った】。この時期、息子は【学校に行かないだろう】とわかっているつもりだったが、一方で【学校に行ってほしい】という思いもあった。

その後、【担任と話す】機会を持ち、息子に対する担任の不適切な対応（皆の前で腕立てをさせた）が契機になって不登校になったことを知った。担任からの謝罪はなかったが、そのことを申し訳ないと思っていた感じを受け、意地悪でそういうことをしたわけではないだろうと、【担任を理解しようとする】気持ちが生じた。一方で、「担任は（自分の不適切な対応を）謝ることはなく、間違っていると思った」とも語っている（【担任の対応は間違っている】）。また、この頃、スク

ールカウンセラーへの相談について学校へ尋ねたが、「スクールカウンセラーはまだ決まっていない」と言われた（【SCにつながらない (SD)】）。Bはこの時点で、担任の対応が不登校の根本原因ではないと感じていたため、スクールカウンセラーに相談したいと思っていた。学校の対応に期待していたところがあった（【学校に期待があった】）。他に相談できる専門家がいなかったため、【どうしたらいいの】と思い、【孤立感】を持った。「退学したら宙ぶらりんになる」等と【所属感のなさ】を感じた。行けないとわかっていたけど、【退学を決断できなかった (SD)】。

Bは、【何とかしなくては】と思い、まず【病院（クリニック）に相談】に行き、週1回ぐらい相談していたが、進展はないと感じたため、その2ヵ月後頃に本やインターネットで調べて、不登校の【相談機関に電話した】。相談員は穏やかで口調も優しく、【安心して話せた】。しかし、当時、息子は家では家族に暴言を吐き、親を避け、ひきこもっていたので（【子の暴言、ひきこもりは続く (SD)】）、相談機関の【フリースクールはまだ利用できない】と思った。一方で、まだ【学校に行ってほしい】というも思っていた。学校の籍を抜くのになぞ抵抗があった。怖かった（【退学することへの恐怖 (SD)】）。次に友人から勧められて（【友人の情報提供 (SG)】）、【思春期相談窓口で相談】した。ここでは精神科医との面談で小さい頃のこととかいろいろ聞かれて、1時間半ぐらい話した後、「発達障害の可能性が高い」と言われた（【発達障害の診断を受ける】）。「障害」と言われて驚き、ショックを受けた（【驚きとショック】）。4、5日何もできずに泣いていた。のんきにしていた自分を責めた（【自責】）。その後発達障害

表2-2. 4例のラベルと統合したラベル（不安と焦り）

統合したラベル	Aのラベル	Bのラベル	Cのラベル	Dのラベル
不安と焦り	担任から頻回に電話 (SD)	担任から頻回に電話 (SD)	担任から電話がある	担任以外の先生に相談した
	電話と先生が怖い	電話に出るのが苦しい	ありがたい	手当たり次第に話す
	毎日泣くような日々	電話に出られなくなった	事務的に連絡が来る感じ (SD)	先生に解決法を聞きたい
	不安で不安でしょうがない	電話の回数は減った	熱心な先生ではない	頼りない (SD)
	地獄のような感じ	学校に行かないだろう	イライラした	状況は変わらない
	不安と焦り	学校へ行ってほしい	担任と面談	学校とつながってほしい (SD)
	不登校を周囲に知られる (SD)		担任の対応への不満	焦り
	人に知られたくない		担任への怒り	相談に行かねば
	人に会いたくない		担任への不信任	教育相談機関に相談
	何もしたくない		しっかりしなければ	いい先生だが物足りない
	学校へ行ってほしい		どうしよう	子が頻回に「死ぬ」という (SD)
	辞める選択肢はなかった (SD)		焦り	学校はいかなくていいかな
	子に気持ちが伝わらない		自殺したらどうしよう	勉強は続けてほしい
	親戚や知人の情報提供 (SG)			ママ友の情緒的支援 (SG)
			ママ友の前で泣く	
			ママ友の情報提供 (SG)	

について本やインターネットで調べて、子に当てはまるところがあり、腑に落ちた感じがした（【発達障害について調べて納得】）。【どうしたらよいかわからない】ので、【担任に相談】したら、「そうなのですか。でも学校に来ないのだったらどうしようもない」と言われ、「通信制もありますよ」と学校案内を渡された。また、【学校から見捨てられた】と感じた。その後、【子育てを後悔】したり、【発達障害を知られたくない】、周りから【責められたくない】という思いで、しばらく誰にも相談できなくなった。その後、【教育相談所での相談】を経て、【発達障害者の家族会に参加】するようになった。その中で、特性は親のせいではない、障害に気づかなくても自然、障害に気づかなかったのは自分だけではないということを知り、【気が楽になる】。しかし、【子の今後の不安はあった】。そして、【発達障害専門のクリニックに予約】を入れたが、【3～4ヶ月予約待ちに焦る】気持ちになった。

どうしようと悩んだ末に、「自分がお膳立てしても無理がある。少し待つ時間が必要」と【本人の変化を待とう】という心境になった。また「学校に行かないのなら、その【時間を豊かに過ごしてほしい】」と思うようになった。そして、Bのみで不登校【相談機関の家族会に参加】するようになった。Bにとってこの家族会は【安心して話せる居場所】になり、【相談機関とつながる】ことになった。その後、息子も相談機関のフリースクールに通うようになった。

(3) Cの経過

Cは、子(当時、中学1年生)が入学後しばらくして、「お腹が痛い」、「頭が痛い」と言い出して、学校に行かなくなった（【子が不登校になる】）。【子は閉じこもる(SD)】ようになり、「人が怖い」とおびえていた（【子は「人が怖い」と言う(SD)】）。【どうしよう】と思った。家で【祖父とは話していた(SG)】ため、皆が通えているのにわが子は【なぜ学校に行けないの】と思い、【接し方がわからなかった】。

休み始めた当初、担任から定期的に「どうですか?」という電話がかかってきて（【担任から電話がある】）、最初は【ありがたい】と感じた。しかし、その後、子の不登校は続いているにもかかわらず、「本人と話をさせて」とか言うことはなかった。【事務的に連絡が来る感じ(SD)】だった。熱心な先生ではなかった（【熱心な先生ではない】）。希望を抱いて入学させた割には、期待したイメージの先生ではなかった」と感じ、【イライラした】。

しばらくして、学校から呼ばれて【担任と面談】することになった。担任は「どうしますかねえ」と、ため息をついたり、「辞めるか来るかどっちかです」、「登校しないと単位は出せない」等と言い、一緒に改善していきましょうという前向きな姿勢を感じなかった。打開策を提案し、具体的な話し合いをしてくれなかったことで、【担任の対応への不満】、【担任への怒り】を感じた。そして、先生からは「面倒くさいから辞めて

表2-3. 4例のラベルと統合したラベル（学校の対応に失望する～なんとかしないと）

統合したラベル	Aのラベル	Bのラベル	Cのラベル	Dのラベル
学校の対応に失望する	子と母で学校に呼ばれる	担任と話す	校長から転校の提案 (SD)	担任にSCについて聞く
	切り捨てるのが早いなあ	担任を理解しようとする	見捨てられた感じ	校長の拒否的態度
	先生への怒り	担任の対応は間違っている	挫折感	学校への不信任感
	学校にとどませたい (SD)	SCにつながらない (SD)	子の混乱 (SD)	自責
	先生に反論できなかった	学校に期待があった	どうしたらよいかわからない	学校の協力してほしい
	先生は学校を辞めさせたいのだ	どうすればいいの		残念に思った
	先生に反論できなかった	孤立感		学校をあきらめた
	取調べのようだった	所属感のなさ		
	あきらめの心境			
祖父 (Aの父) に相談 (SG)				
SCにつないでもらえない				
不安と回避	相談機関に電話する勇気がない	退学を決断できなかった	心療内科に電話	担任の休職を知る
	子の状態を話せない	退学することへの恐怖 (SD)	予約が1, 2ヶ月待ち	学校への拒否感
	学校に行くのも無理		焦り	SCと面談
	どうしてよいかわからない		子の状態悪化への恐怖	心が軽くなった
	1週間以上悩んだ		子の将来の不安	叔父の支援 (SG)
	今後どうしよう		追い詰められていた	夫には相談できない
	誰かに助けてもらいたい		祖父の情緒的支援 (SG)	人に会いたくない
	専門家に相談したい		仕事を逃げ場にしていた	人を困らせたくない
				誰かに話を聞いてほしい
なんとかしないと	何とかしなきゃ	何とかしなくては	自分が何とかしなくては	

子の不登校を経験した母親が相談機関につながるまでの行動と心理的变化過程

くれ」という雰囲気を感じ、【担任への不信感】も感じた。この時期、母親として【しっかりしなければ】という思いと、でも本当は弱いし、【どうしよう】という思いで揺れていた。今後の方向が定まっていなくてもかかわらず、短期間で何とかしよう、とにかくいい方向に向けたいといけないう思い、【焦り】があった。子が【自殺したらどうしよう】という思いもあった。

その後、子と祖母(Cの母)が校長と話す機会があり、「残るか、転校か、早く決めた方がいい」と言われ(校長から転校の提案(SD))、【見捨てられた感じ】と【挫折感】を持った。

転校の提案に子は混乱した様子を見せ(子の混乱(SD))、「子はこんなにワーストとなっているのにどうしよう」と感じた(【どうしたらよいかわからない】)。そこで、Cは【心療内科に電話】したが、【予約が1、2ヶ月待ち】といわれ、「そんなに待てない。受診を待つ間に子が何か嫌な方向に行動を起こすのではないかと、【焦り】、【子の状態悪化への恐怖】を感じていた。さらにCは、「今後、高校に行けるのだろうか。これから先、子はどうなるのだろう。このままひきこもってしまったらどうしよう。不安で、不安で一杯だった」と、【子の将来の不安】も感じた。精神的に不安定で【追い詰められていた】。一方で、Cは、「このままだといい

ない。父親が投げている分、私が何とかしないと」と【自分がなんとかしなくては】と思った。この時期にCの精神的支えになっていたのは祖父(Cの父)で、祖父が逃げ場になっていた(祖父の情緒的支援(SG))。また、【仕事も逃げ場にしてた】。

Cは、おば(Cの姉)から相談機関のことを聞き(叔母の情報提供(SG))、不登校相談機関に併設する心理相談室に母子で相談した(【相談機関に母子で相談】)。この際、Cはなんとなく【息子の変化を感じた】と言う。そして【フリースクールに相談】した。【どこかに所属してほしい】という気持ちもあり、そのフリースクールに通うと【学校の出席になる利点がある】こともよかった。相談の際にも【雰囲気がよかった】、【相談でき、気が楽になった】。そして、【孤独じゃない】、【不登校でもいいんだ】と思えるようになり、【相談機関につながる】。その後、息子は相談機関のフリースクールに通うようになった。

(4) Dの経過

Dの子(当時、小学校5年生)は、クラス替えがあり、しばらくして「給食が嫌だ」と言い出し、学校へ行かなくなった(【子が不登校になる】)。最初は子が登校しないことにイライラして、「何で、何で。何が嫌なん？」

表2-4. 4例のラベルと統合したラベル(相談機関につながるうとする)

統合したラベル	Aのラベル	Bのラベル	Cのラベル	Dのラベル
相談機関につながるうとする	ママ友の情報提供(SG)	病院(クリニック)相談	叔母の情報提供(SG)	転校先を探す
	相談機関に電話する	相談機関に電話した	相談機関に母子で相談	SCから病院を紹介(SG)
	責められるのではないかと	安心して話せた	息子の変化を感じた	病院に電話
	泣いて話した	子の暴言、ひきこもりは続く(SD)	フリースクールに相談	2~3週は予約待ち
	気持ちが楽になった	フリースクールはまだ利用できない	どこかに所属してほしい	病院の治療に疑問
	電話してよかった	学校に行ってほしい	学校の出席になる利点がある	予約待ちはしたくない
	来所は躊躇	退学することへの恐怖(SD)		病院を受診しない
	アドバイスをもらえるかも	友人の情報提供(SG)		SCから相談機関を紹介(SG)
	助けてもらえるかも	思春期相談窓口で相談		相談機関に電話
	すぎる思い	発達障害の診断を受ける		良いイメージを持った
	行かなければ	驚きとショック		相談機関に来所
	相談機関に相談に行く	自責		
		発達障害について調べて納得		
		どうしたらよいかわからない		
		担任に相談		
		学校から見捨てられた		
	子育てを後悔			
	発達障害を知られたくない			
	責められたくない			
	教育相談所での相談			
	発達障害の家族会に参加			
	気が楽になる			
	子の今後の不安はあった			
	発達障害専門のクリニックに予約			
	3~4ヶ月予約待ちに焦る			

と問い詰めたりして（【子を問い詰めた】、【何で学校に行かないの】）、子も「じゃあ、死ぬ」、「飛び降りる」ということが何度もあった（子は「死ぬ」と言う(SD)）。息子と家に二人でいる時間が耐えられなくなってきて（【子と二人でいられない】、【自分がどうかなりそう】）だった。この生活がいつまで続くのだろうと【将来への不安】があった。また子が自殺のそぶりをみせていたため、【生きていてほしい】と思っていた。【子への接し方がわからない】感じで、腫れ物に触るような関わりで、こういったらまた「死ぬ」って言い出すんじゃないかと思い、怖かった。一方で、【楽観的に考えていた面もあった】。最初休みだした頃は、「まあ、いいかな」と思い、その後も不登校は続いたが、「3ヶ月ぐらいで行くかな」とも思っていた。この時期、Dはママ友に子の不登校について話した（ママ友に相談(SG)）。

Dは、学校の中で【担任以外の先生に相談した】。知っている先生（当時の学年主任や養護教諭など）に【手当たり次第に話す】しか方法が分からなかった。先生はなにか解決法なり、息子と同様の事例なり知っているのではないかという思いもあった（【先生に解決法を聞きたい】）。先生方は話を聞いてくれ、「大丈夫よ」、「学年全体で考える」等と言ってくれたが、頼りない(SD)、【状況は変わらない】と感じた。「学校とはつながってほしい」と思い、【焦り】を感じた。そして、「こういうときは【相談に行かねば】」と【教育相談機関に相談】した。そこでは、話を聞いてくれ、子と遊んでくれる先生と出会えたが、【いい先生だが物足りない】と感じた。この頃、子は何回も「飛び降りる」とか「死ぬ」とか言っていたから（子が頻回に「死ぬ」と言う(SD)）、【学校は行かなくていいかな】と思っていた。一方で、勉強はついていけるように、【勉強は続けてほしい】と【焦り】を感じて、子も算数の勉強はしていた。また、この頃、ママ友と会って「どうしたの。大丈夫」と言われた際に、ボロボロと泣いてしまい（ママ友の前で泣く）、困らせてしまった（ママ友の情緒的支援(SG)）。そして「スクールカウンセラーへの相談がよいのでは」と勧められた（ママ友の情報提供(SG)）。

Dは、担任にスクールカウンセラーの面接を受けたと相談した（担任にスクールカウンセラーについて聞く）。すると、校長先生に呼び出されて、「何でそんなことをするんだ」という態度を取られ、「何で来られないんですか」みたいな雰囲気になった。そして、「担任に色々（要望を）言わないでくれ」と言われた（校長の拒否的態度(SD)）。そのような対応があり、【学校への不信感】を持った。「私が何か言った?何かした?」と自分を責めてしまった（【自責】）。何か解決の糸口がないかと思って、学校も一緒に頑張ってもらいたいと思っていたため（【学校も協力してほしい】）、【残念に思った】が、学校には相談できないと思い、【学校をあきらめた】。その後、ママ友の間で「(Dの)子のせいで担任が学校に来られなくなった」といううわさを聞いた。また、「懇談会で校長も“担任は精神的なストレスで休んでいる”と言った」と聞き（担任の休職を知る(SD)）、Dは過呼吸、嘔吐が出るようになり、【学校への拒否感】を持った。次の学期からは担任が替わり、校区内の中学で、【スクールカウンセラーと面談】できるようになった。スクールカウンセラーは肯定も否定もせず話を聴いてくれて、【心が軽くなった】。またこの頃から息子は週末に外出し、叔父(Dの弟)に遊んでもらうようになった（叔父の支援(SG)）。一方で、学校の状況を父親(Dの夫)に相談したところ、父親と息子がケンカになってしまい、【夫には相談できない】と思った。担任の休職の話があって以降、Dは【人に会いたくない】、外に出るのも嫌と思うようになった。特に小学校の同級生の親とは会いたくないと思っていた。それは「大丈夫?」とか「元気になっている」とか声をかけられたら、泣いてしまって、相手を困らせると思ったからである（【人を困らせたくない】）。一方で、会いたくないのだけど、誰かに話を聴いてもらいたかった（【誰かに話を聴いてほしい】）。

Dは、学校とは距離を置くようになり、【転校先を探す】ようになった。【スクールカウンセラーから病院を紹介】され、【病院に電話】した。クリニックの対応者からは、「【2～3週間は予約待ち】。1回子どもと来て下さい」と言われた。このときDは、「やることはカウ

表2-5. 4例のラベルと統合したラベル（安心できる体験をする～相談機関につながる）

統合したラベル	Aのラベル	Bのラベル	Cのラベル	Dのラベル
安心できる体験	安心できる体験	本人の変化を待とう	雰囲気が良かった	安心感を得た
		時間を豊かに過ごしてほしい	相談でき、気が楽になった	
		相談機関の家族会に参加	孤独じゃない	
		安心して話せる居場所	不登校でもいいんだ	
相談機関につながる	相談機関につながる	相談機関につながる	相談機関につながる	相談機関につながる



子の不登校を経験した母親が相談機関につながるまでの行動と心理的变化過程

ンセリングならスクールカウンセラーの方がいいかな。予約が一杯なら行かなくてもいいや」と思い、受診しないこととした（【病院の治療に疑問】、【予約待ちはしたくない】、【病院に受診しない】）。そして、スクールカウンセラーと再度話し、今度は不登校相談機関を紹介された（【SCから相談機関を紹介（SG）】）。【相談機関に電話】したところ、対応した相談員の感じがよく、話を一通り聴いてくれ、【良いイメージを持った】。Dは【相談機関に来所】し、【安心感を得た】。その後、【相談機関につながる】。息子は相談機関のフリースクールに通うようになった。

2. 全体図

図1は、4人のラベルを統合した共通ラベル（表2-1～2-5）をもとに【子が不登校になる】を最初の必須通過点（OPP）、【相談機関につながる】を等至点（EFP）として、その間の、出来事や認知、行動、社会的な関わりを時系列に沿って示したTEM図である。なお、社会的ガイド（SG）、社会的方向づけ（SD）についても4例のラベルを統合した共通ラベルを作成し（表2-6）、全体図に反映させた。対象者が実際にその径路や選択肢を辿った場合は、実線で矢印を引いた。そして、対象者の語りからは得られなかったが、想定された仮想径路については、破線で示した。

以下、全体図について、ラベルを【 】、必須通過点を（OPP）、分岐点を（BFP）、社会的ガイドを（SG）、社会的方向づけは（SD）と示しながらその内容を記述する。

4人の母親達は、【子が不登校になる（OPP）】という事態に直面して、まず【動揺する（OPP）】。そして

息子の家庭内暴力の渦中にあったA以外の3人は【不登校への疑問】を持った。その疑問は解消されることがない中で、母親達は、それぞれ子の問題行動（SD）にも直面し、【子の接し方に悩む（BFP）】。子の不登校に対する【学校の事務的な関わり（SD）】、【学校への期待（SD）】は、母親達に【不安と焦り（OPP）】、【学校の対応への失望（OPP）】をもたらす。子の【不登校に関するうわさ（SD）】が【不安と回避（BFP）（OPP）】をもたらす。【家族や友人の情緒的支援と情報提供（SG）】は支えになっていたが、情報提供については、自分達の現状について適切かどうかの確信は得られず、不安は持続する。A、B、Cの3人は、そのような状況の中、【何とかしないと】と思い立ち、家族や友人からの情報を頼りに相談機関に連絡した。Dはスクールカウンセラーに相談できたため、一緒に考えてもらいながら学校外の相談機関に相談した。A、C、Dは相談することへの不安を持ちながらも、相談機関に連絡し、（【相談機関につながる（BFP）（OPP）】）。そこで現状を受容され、【安心できる体験（OPP）】をする。そして、【相談機関につながる（EFP）】。Bは相談機関で医師に発達障害の診断をつけられたことに動揺し、その後、2つの相談機関に相談後、3つ目の相談機関の家族会で【安心できる体験（OPP）】をする。そして【相談機関につながる（EFP）】。

このTEM図において、筆者らは3つの分岐点（BFP）と仮想経路を設定した。1つ目の分岐点は【子の接し方に悩む（BFP）】である。この時点で母親に対する、学校からの共感的支援（SG）があれば、母親は【焦らず、子の様子を見る】ことができ、徐々に【母子が安定】し、【母子の意思疎通の改善】につながる可能性が

表2-6. 4例のラベルと統合したラベル（SD、SG）

統合したラベル	Aのラベル	Bのラベル	Cのラベル	Dのラベル
子の問題行動（SD）	子の暴力がある	子がひきこもる	息子は閉じこもる	子は「死ぬ」という
		子の暴言 子の暴言、ひきこもりは続く	子は「人が怖い」と言う 子の混乱	子が頻回に「死ぬ」という
学校の事務的な関わり（SD）	担任から頻回に電話	担任から頻回に電話	事務的に連絡が来る感じ	相談しても頼りない
		SCにつながらない		
学校への期待（SD）	辞める選択肢はなかった	学校に期待があった		学校とはつながっていたい
	学校にとどませたい	退学することへの恐怖 退学することへの恐怖		学校への期待
不登校に関するうわさ（SD）	不登校を周囲に知られる			担任の休職を知る
家族や友人の情緒的支援と情報提供（SG）	職場の同僚に相談	友人の情報提供	祖父とは話していた	ママ友に相談
	夫と悩む		叔母の情報提供	ママ友の情緒的支援
	家族や友人の情報提供			ママ友の情報提供
	祖父（Aの父）に相談			叔父の支援
	ママ友の情報提供			

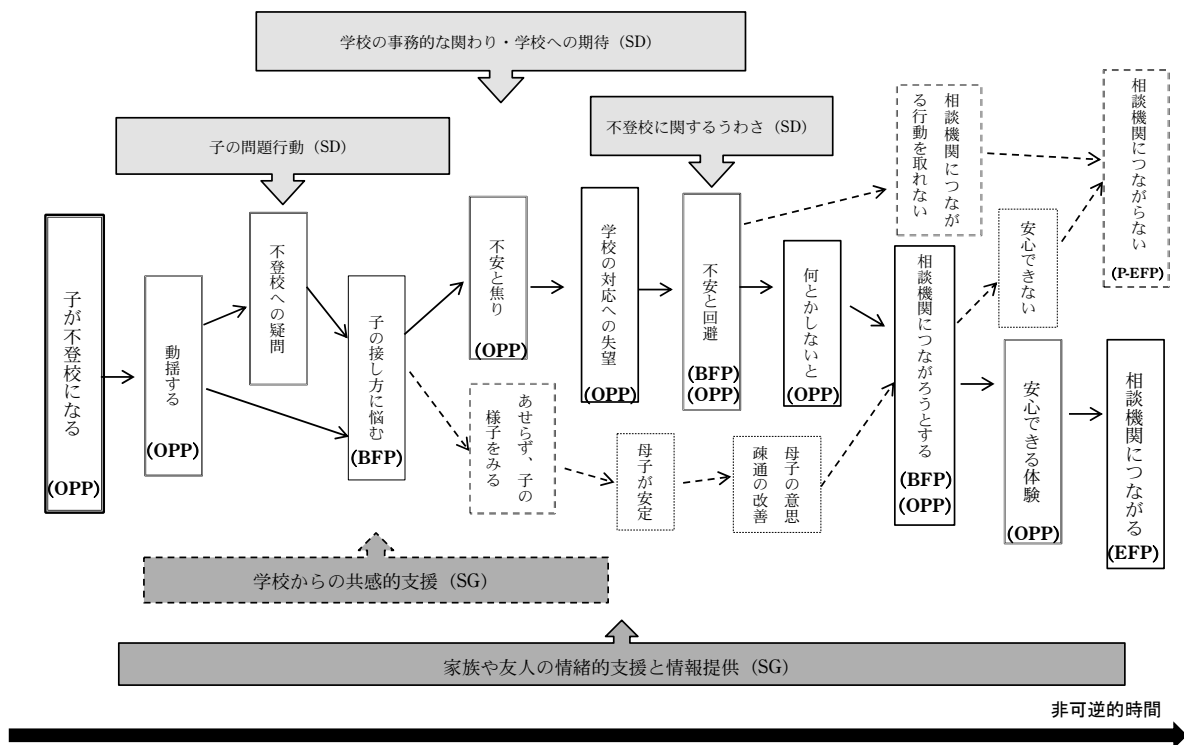


図1 4例のTEM図(全体図)

ある。2つ目は【不安と回避】から【なんとかしないと】という意識を持ってなかった場合、【相談機関につながる行動を取れない】という経路である。3つ目は【相談機関につなろうとする】が、相談機関の初期対応者に母親が【安心できない】と感じたら、【相談機関につながらない (P-EFP)】という経路である。

#### IV. 考察

##### 1. 子の不登校を経験した母親が相談機関につながるまでの行動と心理的变化過程

ここでは、4人の母親に共通した心理的变化過程の特徴について考察する。

子の不登校という想像していなかった出来事に対して、母親達は動揺し、その理由を知りたいと思うが、子とは話はほとんどできず、母親達が学校に行かせたいと思えば思うほど、親子関係は緊張し、子は暴言・暴力・自殺のそぶりなどの問題行動で抵抗していた。そして、母親達は子への接し方が分からなくなっていた。出欠に関する電話等で関わってくる担任の先生に、どうしたらよいかわからず不安な母親達は、現状を解決してくれるかもしれないという期待を持った。しかし、その期待は「学校の事務的な関わり (SD)」の継続によってしぼんでいき、むしろ、子が不登校になってい

る母親のつらさへの共感がなく、事務的に、状況確認目的で電話してくる担任との対応に怖さ (A)、苦しさ (B)、イライラ (C)、裏切られた感じ (C) を受けた。不登校の早期解決は難しいとしても、担任の先生から見て、子が不登校に至るまでの学校での様子やきっかけとして思いあたること、今後の学校側の支援を率直に話してもらい、共有し、母親自身の思いを聴き、共感してくれることを母親達は期待していたが、そのような支援的な関わりはなかった。Dはなにか解決法なり、息子と同様の事例なり知っていることを期待して、学年主任等の先生に相談したが、相談しても頼りないと感じた。この時点で既に母親達と学校の協力関係が噛み合わなくなっている。

欠席が増えるにつれて、学校に行かせたいが行こうとしない子へのもどかしさ、子の問題行動に不安、恐怖を感じ、焦ってくる。そして学校から再度、事務的に転校を提案される。高校生が不登校になり、欠席日数が一定数を超えると留年あるいは退学となるため、学校側の対応はその意向を保護者に確認するものにならざるを得ない。母親達 (A, B) は、それを理解できないわけではなかったが、学校の対応に失望し、先生に怒りの感情が起こった。私立中学に通学していたCもA, Bと同様に転校を提案されて、見捨てられた感じ

を受けた。その背景には、**学校への期待 (SD)**があった。**学校への期待 (SD)**には、辞める選択肢はなかった (A)、退学することへの恐怖 (B)、学校とはつながってほしい (D) が含まれた。母親達は、子が登校できない状態にある現実を理解していても、希望を描いて入学した高校や私立中学校に期待を持っていたからこそ、その学校を辞めなければならない事態に直面したことに大きな喪失感を抱いた。また、Dが、子が不登校になった初期に「不登校の理由を問いつめる」行為をしたと述べているように、**学校への期待 (SD)**には、「学校に行くのは当たり前」といったいわゆる学校信仰も含まれていると考えられた。

不登校が続く中で、周囲からの声掛け、うわさ、世間体の影響から、「人に知られたくない」という思いも生じ、母親達は外部との連絡を避けるようになっていった。特にDは、子の不登校の影響で担任が精神的不調となり休職したといううわさを聞き、人に会いたくないと思うようになった。Dは、比較的早い段階でスクールカウンセラーに相談できていたが、学校への拒否感が強くなり、「人に会いたくない」、「人を困らせたくない」など、回避的になった。

不登校後、母親達の不安は持続したが、所属校に残れないことがわかる時期 (A、B、C)、あるいは、学校の協力を期待していた時期 (D) までは「焦る」のに対して、残れないことがわかったり、学校から期待した協力が得られないと悟った後は「回避的になる」という変化がみられた。あきらめの心境 (A)、孤立感 (B)、見捨てられた感じ (C)、学校をあきらめた (D) というラベルからわかるように、母親達にとっては期待していた学校の支援を失った喪失感から、しばらく子の不登校という問題から回避したい心境が生じていたと考えられた。

学校の対応への失望、不安と回避を経て、母親達は学校外の相談機関に相談しようとするが、そこにも大きな心理的障壁があった。学校の支援に対する喪失感と、子の不登校のうわさが、母親を心理的に消耗させ、現実を回避したい心理が続く中、今後についての焦りから「何とかしなくては」と、相談行動を起こしていた。

A、B、Cは、学校で得られなかった情緒的支援を外部に求めて、まず自分の心理的支援者や居場所を求める行動をとったように思われた。Aは、相談機関に電話を掛けることや、来談することに関して抵抗があり、責められるのではないかという思いの中、相談員に泣いて話したと語り、Bも相談機関の家族会にまず、つな

がった。Dはこの頃にスクールカウンセラーとの面談を受けることができていたため、現実回避的な心情を持ちながらも、何とかしなければという焦りは感じず、他の3人と比較すると落ち着いて、子のために相談機関につながるようとしたと考えられた。

相談機関につながるまでの過程では、比較的早く相談機関につながったAやCに対して、Bは病院 (クリニック)、相談機関、思春期相談窓口、教育相談所、発達障害者の家族会、発達障害の専門クリニックと、次々に相談先を替え、最終的に相談機関の家族会につながった。Dはスクールカウンセラーを通して紹介された病院に連絡した後、予約待ちを待たずに相談機関につながった。Bは、孤立感、所属感のなさを感じながらも、退学を決断できず、現実から回避する心境もあまり持てないまま、B自身を支えてくれる「相談員の値踏み」(吉村・家近、2014) をしたと言ってもよいだろう。4人の母親は、母子ともに安心して支援を受けられる相談機関を求めており、いずれも初回相談時に安心できる体験をして、相談機関につながった。

経過中、**家族や友人の情緒的支援と情報提供 (SG)**は母親達が相談機関につながるまでの大きな支えになっており、社会的ガイドとなっていた。Aは職場の同僚、夫、親戚、知人、祖父、ママ友の支援を、Bは友人の、Cは祖父、叔母の、Dはママ友、叔父の支援をそれぞれ受けていた。今回の調査の中で母親達から、必ずしも全ての支援者が語られたわけではないが、4人の中ではBに対する支援が最も少なく感じられた。そして、4人の中ではBの不安焦燥、孤立感が最も強く表出されていたことを考えると、この時期における家族や友人の支援の程度と母親の精神的安定は関連していると思われる。

吉井 (2017) は、「不登校生がひきこもりから脱出して現実に向かうためには、本人と家族が自らのうちにある学校信仰から解放されることと同時に自己肯定感を持つことが早道」であり、「学校信仰 (学校に行かねばならない) にとらわれると親子の緊張を強める。」と述べている。母子共に、学校に行くのは当たり前と思って過ごしてきた生活の中で、急に不登校という出来事に遭遇することで、母子はそれぞれ自らの学校信仰を見直さなくてはならない状況に直面した。しかし、自らの学校信仰という価値観が自分自身と子を苦しめているということに気づき、その価値観を変化させるには時間がかかるようだ。今回調査した時期の経過で、4人の母親達は学校信仰から解放されていないし、自己肯定感も高まらないまま、相談機関につながって

た。学校関係者、スクールカウンセラー、相談機関の相談員は、不登校初期から母子が自己肯定感を持てるような関わりを提供する必要がある。

## 2. 仮想経路の検討（相談機関につながらない要因の検討）

ここでは、4人の語りから得られたTEM図に、相談機関につながらない要因を検討するために筆者らが加筆した仮想経路について考察する。

子が不登校となり、家庭に最初の介入を行う機関は学校である。今回調査した4人の場合もDを除く3人は、最初は担任からの状態確認の電話を受け、担任の事務的な関わりに不安、焦燥感を高めていた。したがって、子が休み始めた初期から担任教師は、母親に対して共感的に関わり、情緒的支援を提供する必要があったことが明らかとなった（仮想社会的ガイド「学校からの共感的支援（SG）」）。佐藤・花田・若島・横谷・上西（2017）は教師が不登校の児童・生徒をもつ保護者と連携にあたっての留意点として、保護者の傷つきに十分留意すること、多様な保護者がいることを理解すること、無知の姿勢で保護者の語る物語に耳を傾けることなどを挙げている。まず、教師は保護者に接する際にこのような事項を意識していることが必要である。しかし、実際に不安な母親と対応すると、口調や態度が不適切になる場合も少なくないだろう。スクールカウンセラーは、そのような担任教師の初期対応について、教師を支援することができるかとよいと考えられる。担任教師の母親に対する初期対応が支援的であれば、子の不登校により不安になっている母親の焦り、学校への失望を防げた可能性がある。

また、担任教師は、スクールカウンセラーへのつなぎを不登校の初期から積極的にすることが子の接し方に悩む母親の支援になることも示唆された。不登校後は、スクールカウンセラーも母親と面談していくことにより、仮想経路のように、母親が【焦らず、子の様子を見る】ことができるようになり、【精神的な安定】、【子との意思疎通の改善】を得て、【相談機関につながる】という道筋を、それぞれの子のペースに合わせて進めていけるようになる可能性がある。しかし、今回の4人については、不登校になっている本人（子）が主体的に現所属校以外の安心できる居場所や学習環境を求めるまで親として見守るという視点は軽視されていたように感じられた。

相談機関につながるかどうかの分岐点は、学校の対応に失望した後に、母親達が「何とかしないと」と相

談機関に援助希求行動を起こすかどうかにあった可能性がある。この時点でDのように既にスクールカウンセラーに相談できていたり、家族や友人等周囲の支援が十分あれば、母親の労力は少なくすむと思われる。今回の調査でも示されているが、医療機関への受診は予約待ち時間が長くなりがちであり、母親に対してはBのように、情緒的な支援にならない場合もあるので、その前にまず不登校の相談機関にいる臨床心理士や学校ソーシャルワーカー等の専門職につながり、そこで母親に情緒的な支援を提供する方がよいかもしれない。そのためには、日頃より学校、スクールカウンセラー、不登校の相談機関との良い連携を築いておくことが大切である。

相談機関は、初期面接で、学校との関係での傷つき経験、学校信仰へのとらわれ、子の問題行動、精神的不調にどう対応すればよいか、今後、子はどうなっていくのかについて、心の整理が十分にできていない状態の母親の心情に共感、受容し、安心感を与える関わりをすることが求められていた。一方、相談機関が初期に母親を安心させる関わりができないと（仮想ラベル【安心できない】）、【相談機関につながらない（P-EFP）】可能性がある。医療機関に相談したBやDも医療機関につながるだけでは安心できず、不登校相談機関につながろうとしていた。母親は対応した相談員や相談機関の場の雰囲気から安心感を得ていた。相談員が焦らず、子のペースで見守ることの重要性を、母親に非言語的にも伝えられることが求められていたことも示唆された。

## 3. 本研究の限界と今後の課題

最後に本研究の限界と今後の課題について述べる。本研究で取り上げた不登校児童生徒4人のうち、高校生2人と私立中学生だった1人の計3人は、不登校の長期化に伴って在籍が危うくなりやすい環境にいたことになる。小学生1人についても、必ずしも制度上はその必要はないが、転校先を再検討せざるを得ない環境にあった。つまり、今回の対象者はすべて、不登校に伴い転校を検討せざるを得ない環境にいたため、結果として作成されたモデルが、そのような環境の影響を受けた可能性がある。今後は、不登校状態から在籍校に復帰した者も対象として同様の調査を行い、今回の結果と合わせて検討することで、より多様な支援モデルを作成できると思われた。

## 引用文献

- 張替裕子 (2008) スクールカウンセリングにおける家庭訪問を活用した不登校支援—「支援を求めない保護者」への支援という観点から— 目白大学心理学研究, 4, 125-135.
- 飯田敏晴・金沢吉展・井上孝代 (2006) 学生の保護者における専門機関への来談に対する態度尺度作成の試み 日本教育心理学会総会発表論文集, 48, 401.
- 伊藤美奈子 (2006) 不登校の子の理解と援助(9) 再登校・別室登校のときの関わり 児童心理, 60(17), 1705-1711.
- 文部科学省 (2019) 平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果. [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/31/10/1422020.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/10/1422020.htm) 2019年10月20日取得
- 佐藤宏平・花田里欧子・若島孔文・横谷謙次・上西 創 (2017) 第4章 不登校・ひきこもり. 長谷川啓三・佐藤宏平・花田里欧子(編), 事例で学ぶ生徒指導・進路指導・教育相談, 遠見書房, pp.43-57.
- サトウタツヤ (編著) (2009) TEMではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして— 誠信書房.
- 藤後悦子・大橋恵・岩崎智史 (2013) 子育て中の母親のスクールカウンセラー利用イメージ 日本教育心理学会総会発表論文集, 55, 519.
- 安田裕子・サトウタツヤ (編著) (2012) TEMでわかる人生の径路 質的研究の新展開 誠信書房.
- 吉井健治 (2017) 第4章不登校と関わる十二の技 不登校の子どものこころとつながる, 金剛出版, pp.45-76.
- 吉村美佐子・家近早苗 (2014) 不登校などの問題状況にいる子どもの保護者が援助者の援助を受け止めるプロセス 聖徳大学児童学研究紀要, 16, 31-39.

## 付 記

本論文は、第2筆者が2016年度に提出した修士論文の内容の一部について、筆者らが再検討し、筆頭筆者が新たに論文化したものである。本調査にご協力いただきました皆様に、心より感謝を申し上げます。